行政書士しが

発行所　滋賀県行政書士会
発行人　井上超由／編集人　奥野慎太郎
所在地　滋賀県行政書士会館
〒520－0056
大津市末広町２－１（ＪＲ大津駅前徒歩１分）
TEL(077)525-0360・FAX(077) 528-5606
E-mail：shigakai@gyosei-shiga.or.jp
URL：http://www.gyosei-shiga.or.jp/

# 夢のある夢のような夢の話

業務推進部長　玉山　国雄

まことに歳月というやつは自分勝手なやつで、人の都合などおかまいなしに、勝手にやって来ては勝手に追い越して行く。なるほど、歳月は人を待たないのだ。黙って人を追い越して行くだけである。しかも、年々歳々その速度は増すばかりである。昨日は今日の昔、光陰は矢のごとしである。

にもかかわらず惰眠を貪って人は老い、バックミラーばかり見て来し方の人生の答え合わせに余念がないのだ。

気づけば今年も、はや師走である。あの暑かった夏が遠い昔のことのように思えて妙に懐かしいが、あの夏、地震や大雨で被災された人々がいたことを忘れてはなるまい。

さて、新年に向けて夢のある話でもしてみろということだ。たしかに、もう夢ばかり見ている歳でもないが、それでも何歳になろうと情熱さえ絶やさなければ人はまぶしく輝ける。

ところが年寄りが語る夢の話は、たいてい話の途中から昔の自慢話に脱線して、やがてそれは怪しげなホラ話になって、ついには「近ごろの若いモンは」式の説教話や「昔はよかった」式のグチ話になるのがお約束である。あとで若い人たちから冷評を浴びるのがオチだ。

とは言いつつも、そんな若い人たちに一番足りないのは勇気だ。自らが主体となろうとせず、安全地帯の傍観者でいようとする。上手に立ちまわって他人に褒めてもらうことばかり考えている。

起業家の99％は失敗する、芸術家のほとんどは「モノ」にならない。そんな小賢しい話をどこかで聞いてきて、なおさら何かに挑戦しようとしない。自ら挑戦して失敗してみようとしない。

起業家の99％は失敗すると言うが、気にいった就職先がないからここはひとつ起業でもしてみようか、という程度の動機では最初から結果は見えている。自分のアイデアを社会で試してみたいとか、自分のビジネスモデルで世界に挑戦したいとか、聞く人をしてワクワクさせるような「夢のある話」ができなければ起業などせぬがよい。つかみどころのない「夢のような話」や、ただの「夢の話」で終わるだけだ。「夢のような話」はたいていインチキだし、「夢の話」は自慢話と同じで話している本人は実にいい気持ちだが、聞かされている方はたまらない。

理想と蹉跌は表裏一体である。大事なことは、失敗から教訓を引き出して、なお夢を追うことをやめないことだ。失敗は若者の特権でもある。恐れることはない、浮かび上がるチャンスはいくらでもある。やると決めたらハードルを越えるだけだ。

平成20年度には79,590人の受験申込みがあった行政書士試験だが、年々その数は減少して、本年度の受験申込み者数は50,926人まで減った。この10年間だけで28,000人以上の減少である。率にして約36％もの減少である。早晩この試験の受験申込み者数は50,000人を下まわるに違いない。

ところが受験申込み者数がこのように激減している中、この10年間で行政書士会への登録会員数は、驚くなかれ、なんと6,800余人の増加をみたのだ。ちなみに滋賀会の会員数も、同期間で416人から462人と増加している。

一般財団法人行政書士試験研究センター発表のデータから推察すると、平成29年度の同試験の受験者の約70％は20歳～40歳代の人たちである。そして、合格者の半数以上を20歳～30歳代の若者たちが占める。40歳代の合格者を含めると、合格者に占める彼らの割合は77％以上にも及ぶ。

これらの数字から色々なことが想像できるだろう。増え続ける行政書士と試験に合格した多くの若者たち。どうか自由に想像をめぐらしてほしい。

全国の行政書士会会員の年齢構成は知らないが、年齢構成が試験の結果と連動しているかと問われると、どうやらそうでもなさそうだ。この10年の間に増えた6,800余人の中にいったいどれほどの若者が含まれていたのだろう。

斯界に名を馳せるベテラン諸氏や長老も、みんな昔は若かったのだ。昔の若かった時代のことを思い出してほしい。理屈をこねて浮世離れしたことばかり言わず、若者には含蓄と滋味に富む言葉をかけてやってほしい。若者を取り扱うのに推量と同情をもってしていただきたい。

増え続ける行政書士の裏で、夢破れて廃業する人は後を絶たない。ことほどさように情熱とは夢まぼろしのごとく儚い。